

えにし 通信 縁 Vol.1

誰もが「おめでとう」と
誕生を祝福され
「ありがとう」と
看取られる地域づくり
マガジン

2014.12.1

大津市にある、社会福祉法人真盛園地域交流センター「老いも若きも」に集まった、子育て中のママや一人暮らしのお年寄り、散歩途中に休憩に立ち寄ったみなさん。ここは誰でも立ち寄れるあったかい居場所。



CONTENTS

- * あなたにとって「縁」とは？
～シンボルマークにこめた思い～P2-3
- * 縁を広めよう・深めようインタビュー
「生活にかかわる問題についているんな
関わり方をしている人が集まって
話すことで解決方法が生まれます」
同志社大学 社会学部 社会福祉学科教授
滋賀の縁創造実践センター副代表理事
上野谷 加代子さんP4-5
- * 滋賀の縁創造実践センター
7つの取り組みP6-9
- * インフォメーション.....P10
- * 縁でつながる・広がるP12

滋賀の縁創造実践センター

あなたにとって えにし 縁とは?

住吉会館(守山市勝部の自治会)で開催している
カフェ「ちょっと」で10人に聞きました。

※カフェ「ちょっと」はP12で紹介しています。



「縁」は
人とのつながりです
ね。最近は家庭内でも希薄に
なっています。若い人はおじいさ
んおばあさんとのつながり、お年
寄りも若い人とのつながりが無く
なってしまう。年齢を超え
たつながりが大事だと思
いますね。

川本隆志さん(70歳)
※カフェ「ちょっと」の
マスター



コー
ヒーはいい「縁」をつ
くってくれます。コーヒーの
美味しさに引かれて世代に関係
なく地域の人に来て、地域の身近
な話題からたくさんの「気づき」も
あります。地域の発信場所が
「縁」によって生まれてい
ますね。

一人で
はなかなか来れな
かったのですが、お隣の林さ
んに誘っていただき、一歩踏み
出す事ができました。個人的な
「縁」によって人とのつながりが
広がり、地域の委員としての
お手伝いにも力が入り
ます。

同じ地
域で挨拶がないと寂
しいし、人とのつながりが
ないのは気持ち的には秋の夕
暮れの悲しさでしょうか。だから
「縁」は本当に大事です。縁で
出会った人と話すことで元
気も頂き、長生きでき
ますよ。

林 久美子さん
(80歳)



マスターの

川本さんは、カフェのある日にお
誘いの電話までしてくれるんです。大阪
から来て知り合いもいなかったんで、これこそ
嬉しい「縁」ですね。年配の方も多く、皆さん私
のおじいさんおばあさんのように親切に声を
掛けてくださって毎回楽しみにして子ど
もも来ています。

守 伸恵さん
(32歳)
奈々美ちゃん
(2歳)



ここで

いろんな人と話しが
できる、それ自体が「縁」で
すね。ただ、親しい仲にも礼儀
ありで、言葉一つで「縁」も無く
なってしまいます。人への気配り
も「縁」を深めるのには大事
なことだと思います。

上田 喜美代さん
(75歳)



奥村 哲さん
(73歳)



この辺りは娘と一緒に
歩く散歩コースで、こんな場所があるんだと思って入った
のがきっかけです。それ以来、声をかけて頂くので必ずカフェが開催さ
れる時は来ていますね。こちらに来て間がなく、ご近所付き合いもあり
ない中で、毎回声をかけてもらい、まさに「縁」を身近に感じ
ています。

播野 久美子さん(40歳)
詩織さん(17歳)



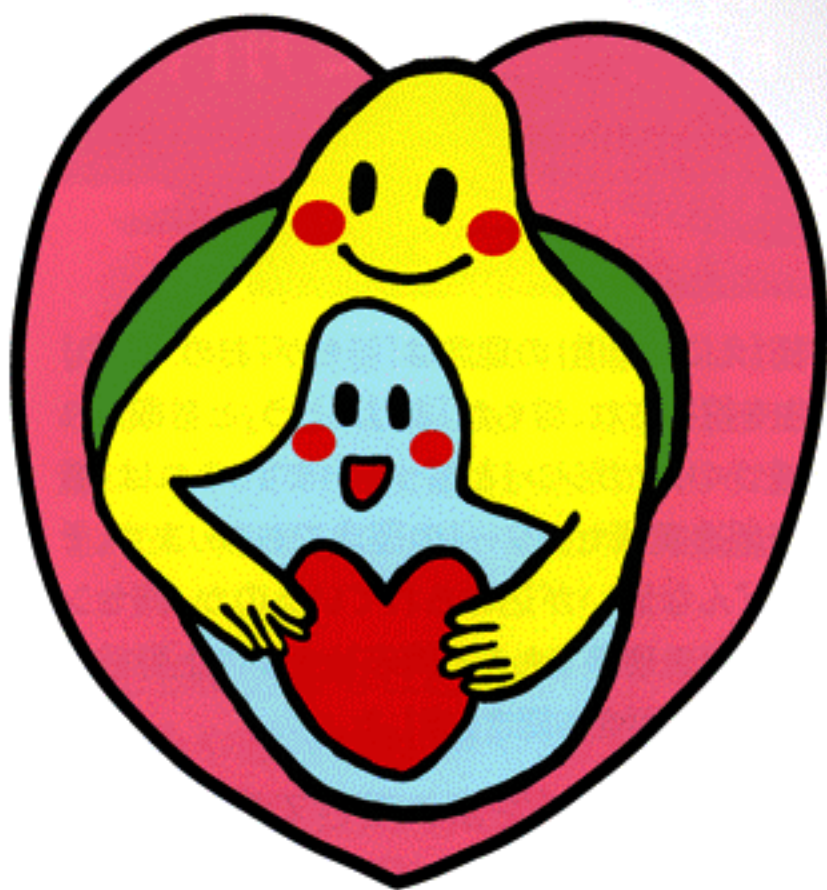
滋賀の縁創造実践センター

シンボルマークにこめた思い

「滋賀は人のまなざし、人の心が温かい。滋賀で暮らしてよかった。」とだれもが思える地域にしたい。深刻な生活課題を抱えながら制度の対象にならず困っている人、社会から孤立し支援につながらない人。いくつもの困難を同時に抱える家族。表立っては見えにくいかもしれませんが、今日の社会の現状です。このような問題に対し、「気づいたものが実践しよう。福祉関係者が分野関係なく協力しあい、解決のために取り組もう」という志を持った団体や個人が「滋賀の縁創造実践センター」を立ち上げました。

支援者がつながり、困難を抱えている人と支援者がつながり、会員の浄財と人財で制度の枠にとらわれない福祉の実践を一步ずつ積み重ね、人を本当に大事にする滋賀の福祉文化を皆さんとともに創りたいと願います。

こうした設立の思いを託したシンボルマークを募集し、最優秀賞に選ばれた藤居さんのデザインを、広報に活用させていただくことになりました。ご応募いただいた皆さんの思いを大切に、「滋賀の縁」をつなぐ活動に活かしていきます。



シンボルマークのイラストに込めた思い

藤居紗来さん(長浜市立長浜北小学校3年)

「みんなが仲良く助け合えることって、とてもいいなと思ってこの絵を描きました。選ばれてとてもうれしいです。このような賞をいただき、ありがとうございました。」



今回初

めて来ました。山中さんと一緒にここで地域活動の相談を兼ねて一緒に来させてもらいました。声をかけていただくと、こうした場所も来やすくなりますね。お友達の「縁」大事です!

カフェ

「ちょっと」のスタッフなんです。今日はお客さんで、打ち合わせを兼ねてきました。ここは初めての人も会話ができる楽しい場所です。ここに来る人たちは若い人もお年寄りも「縁」があって来たいです。



小島 千賀枝さん
(66歳)



服部 由美さん(54歳)



山中 やす子さん(64歳)

生活にかかわる問題について いろんな関わり方をしている人が集まって 話すことで解決方法が生まれます。

本誌「えにし通信」の理念は「誰もが『おめでとう』と誕生を祝福され、誰もが『ありがとう』と看取られる地域づくりマガジン」と謳っています。それは「滋賀の縁創造実践センター」の理念でもあります。そこにはどんな思いが込められているのか。同センターの副代表理事でもある同志社大学の上野谷加代子先生にお話をお聞きしました。

幸せとは、誰もが生まれてきて良かったと感じられ、一人ひとりが価値ある存在だと認め合えること。

谷口 「滋賀の縁創造実践センター」が立ち上げられました。福祉政策や様々な制度、サービスが充実している中で、センターの設立にはどんな意味があるのでしょうか。

上野谷 確かに福祉政策や制度は充実してきましたが、うまく機能していませんよね。サービスや制度があっても、人々が暮らしの中で幸せを感じられない状況であれば、それは失敗といってもいいと思います。幸せとは、誰もが生まれてきて良かったと感じられ、一人ひとりが価値ある存在だと認め合えることです。社会から疎外され、邪魔者扱いされていると感じることが人間には一番辛いことです。

私は、社会福祉は幸せ探しと幸せづくりだと思っています。

それをするのは本人ですが、幸

せを感じられない人に対しては私たちが働きかけて、幸せを感じてもらいたいですよね。その働きを担うのが「滋賀の縁創造実践センター」だと思います。

「おめでとう」「ありがとう」と言い合える関係性があるからこそ実現可能な、とても人間味のある優しい取り組み。

谷口 本誌は「誰もが『おめでとう』と誕生を祝福され、誰もが『ありがとう』と看取られる地域づくりマガジン」と銘打っています。センターの理念にもなっているのですが、どういった思いが込められているのでしょうか。

上野谷 例えば「オギャー」と生まれてきたときに、本来はたくさんの愛情を受け、保護されながら人として育っていきますが、貧困や虐待などの理由で、家庭で愛情が受けられない場合があります。また、人が年老いて亡くなる過程でも、多くの人の手を借りる必要があります。そんな中で生まれたときに「おめでとう」と祝福され、亡くなるときに周りの人に「ありがとう」と感謝しながら看取られるということは、人として生まれ、人として死んで行くための「尊厳」ある形なんです。

今、地域の福祉サービスは、児童養護施設や特別養護老人ホームなど、それぞれの施設の囲いがあり、また、児童福祉法や老人福祉法など様々な法律の範囲で仕切られた縦割りのシステムの中で実施されています。「滋賀の縁創造実践センター」は、その縦割りの壁に風穴をあけて、幸せづくりのために支援が必要な人に対して、様々な方法でエネルギーが注がれるようにしていこう、ということを目指した取り組みです。

これを実現していくためには、人様のことを喜んだり



インタビュー／谷口郁美

滋賀の縁創造実践センター所長
滋賀県社会福祉協議会地域福祉部長

同志社大学社会学部社会福祉学科教授
滋賀の縁創造実践センター 副代表理事

今回お話を伺ったのは

上野谷 加代子(うえのや かよこ)さん

大阪市立大学家政学部社会福祉学科、同大学院修了。研究テーマは、地域を基盤としたソーシャルワークの展開方法(論)と教育方法。日本地域福祉学会会長、日本福祉教育・ボランティア学習学会前会長、全国ボランティア活動振興センター運営委員会委員長、「広がりボランティアの輪」副会長等で活躍。このほか「災害時要援護者の避難に関する検討会」(内閣府)委員、「民生委員・児童委員の活動環境の改善に関する検討会」(厚労省)座長など歴任。モットーは「清く、正しく、美しく、そして朗らかに」。



悲しんだりする感情を交わすことで、関係性を作り上げていく必要があります。「おめでとう」「ありがとう」と言い合える関係性があるからこそ実現可能な、とても人間味のある優しい取り組みではないかと思っています。

課題を抱えた人の背後にいる 家族や地域を全体的に見ることが大切。

谷口 例えば、児童虐待事件が起こるたびに、現場での対応の甘さが取り上げられるものの、繰り返し同じような事件が起こります。なぜ、支援者の動きがうまくつながらないのでしょうか。

上野谷 「この命が大切だ、何とかして守らなければ」という事態に直面したときに、専門職としてのプロ意識は大切ですが、子どもの命を守るために、もっと多くの職種や住民の方との信頼関係づくり、協働が大切ですね。住民の方の“喜怒哀楽”を大事にしてともに歩む専門職です。今回、事例検討会をしましたが、保育士さんは“喜怒哀楽”を素直に出されましたね。

谷口 そうですね。地域での会合でも、保育士さんやヘルパーさんからはたくさんの「気づき」の話が出てきます。親、家庭全体をよく見ているんだなあ実感しました。

上野谷 保育士さんは、子どもに対する親の態度を見て「これでいいんですか?」と思ったり「許せない」と感じたりするわけですね。このように、ただ子どもだけを見るのではなく、その背後にいる家族や地域を全体的に見る、ということが大切なんです。例えば介護保険という制度の中で高齢者支援の仕事をしていると、障害者のことまで見えてこない。また、子どもと関わる仕事をしていたら、高齢者や障害者のことまで見えてこない

んです。だから、生活にかかわる問題について、いろんな関わり方をしている人が集まって話すことが大事で、そこからいろんな解決方法が生まれるのではないのでしょうか。専門職ももっと助けられ上手になりましょう。

私たちに必要なことは周りの人の 悲しみや嘆き、楽しみや喜びに気づき、 そういう気持ちを分かち合うこと。

谷口 確かに担当している分野の課題しか見てこなかったかもしれません。みんなで井戸端会議のように自由に話せる場があってこそ、トータルな関わり方ができていくんでしょうね。こうした課題を抱えた人の周りにいる地域の人たちは、どんなことを心がけたら良いでしょうか。最後に一言、アドバイスをお願いします。

上野谷 周りの人の悲しみや嘆き、楽しみや喜びに気づきましょう、ということですね。そして、そういう気持ちを分かち合うことです。「おめでとう」「ありがとう」と声をかけ合う関係を大事にしてほしいですね。また、「滋賀の縁創造実践センター」の活動を理解して応援してもらいたいと思います。最初は「よくわからないなあ、でも面白そう」というところからで十分です。

谷口 子どものSOSの会議を開いたとき、ある市の民生委員さんが、地域で妊娠された方に「おめでとう」と声をかけている、と言われていました。地域にとって子ども一人が生まれることはすごく大事なことから、ということなんです。それが「人を大事にする」ということだと実感しています。「滋賀の縁創造実践センター」にもこの思いを活かしていきたいですね。

今日はどうもありがとうございました。

7

滋賀の縁創造実践センターの

7つの取り組み

地域のなかにある生活課題

1

重度の障害のある人の地域生活支援

重度の障害がある人はたいいてい訪問看護を利用して自宅で入浴していますが、週1、2回の人も多いことがわかりました。毎日入れてあげたいと家族は希望しても、高齢の親が体の大きな子どもを風呂に入れることは負担が大きすぎます。近隣に高齢者施設があれば、訪問看護を利用して、その風呂に入れたいだろうかと思います。



課題別小委員会

「制度の横だし・運用改善」小委員会

- 医療ケアが必要な人の地域生活・日常生活には看護師が不可欠。
- しかし訪問サービスは自宅外では利用できない。
- まずは高齢者施設の風呂を障害者が利用できるようにすること、自宅外の居場所で訪問看護や訪問介護・訪問入浴が利用できるようにすること。

2

社会的養護にかかる子どもたちの自立支援

さまざまな理由により家族と一緒に暮らすことができない社会的養護の必要な子どもたちは、施設や里親から自立すると、制度による支援は途切れます。そして、就労や住まい探し、お金のやりくりなど、なかなか相談できずにつまずいてしまう子どもが少なくないのが現状です。育った施設や里親が精一杯支援しますが、自分の力で社会で生きていくということはそう簡単なことではありません。



「要養護児童の自立支援」小委員会

- 仕事が見つかって、まわりの理解や支援が十分には得られず、途中でやめてしまう子どももいる。
- 入所中に、本人が「働く」ことへの理解や自分に合った仕事に対するイメージをもち、同時に、受け入れる側が、きちんと社会的養護にかかる子どもの背景を知り、理解することが大切。
- 困ったときにはいつでも相談できる人、いつでも帰れる居場所が必要。(退所後のフォロー)

3

支援に結びつかないひきこもり

仕事や学校に行かず、家族以外の人とほとんど交流をしない「ひきこもり」は、本人から相談があることは少なく、また、まわりがその存在に気付いていてもどこにつないだらよいのか分からず、なかなか支援に結びつかないのが現状です。



「ひきこもり等の支援」小委員会

- 例えば、高齢者支援や障害者支援で専門職や民生委員児童委員がかかわっている世帯で、「息子さんがひきこもっている」ということに気付いたとしても、どのように支援につないだらよいかわからないケースがたくさんある。
- 当事者家族の会や地域の相談機関等、どこに支援にもつながっていない人に対して、どのようにアプローチできるか。
- 各地域ですでに取り組んでいる家族会等の活動を活かし、エリアを越えて学び、交流する場が必要。

滋賀の縁創造実践センターのコンセプトである「縁(えにし)」。

この「縁」を実践するために同センターでは、会員の高齢者施設や児童養護施設、障害者の相談機関、保育所、社会福祉協議会等から寄せられた「気づき」から生まれた、7つの小委員会が活動をスタートしています。その取り組みについてご紹介します。

<課題別小委員会>

センターに寄せられた福祉現場での「気づき」・制度のはざままで支援の手が届いていない課題を解決に導くため、企画員による企画会議を行っています。企画員は、会員団体・法人から参画している現場の実践者と県の関係部局の職員で構成され、現在50名ほどです。各分野から集った企画員は小委員会に分かれ、それぞれの課題解決に向けて具体的な企画立案に取り組んでいます。



活動内容

入浴は、健康管理上の制限がなければだれにとっても、こころとからだの気持ちよくなるものです。縁センターでは、医療ケアの必要な重度障害者が週1、2回しか入浴できない現状をなんとかしようと、入浴実現モデル事業を企画中です。

訪問サービスは自宅にしか行けないという制度の壁、介護保険と障害者福祉という壁を越えて、障害のある人が自宅に近い施設等でゆったりと風呂に入れるサービスの実現を目指します。

一人でも多くの子どもたちが、自分に合った仕事を見つけ、働き続けられるよう、施設入所中や里親に委託されている中学生の就労体験事業を実施します。また、企業との懇談会を実施し、つながりを増やしていくと同時に、企業側へ向けたハンドブックを作成して啓発活動を行います。さらに、そうした子どもが働くことを支える人材を育成するため、先進事例に学ぶ機会をつくりながら、退所後の居場所づくりにも取り組んでいきたいと考えています。

当事者家族同士が交流できる場や、支援のための拠点づくりに取り組みます。また当事者の思いを大事にし、家族が自分以外の子どもを知り、学ぶ機会と場所を提供することで、家族が息抜きできて、誰でも寄れる居場所をつくります。

また、本人が働くこと(活動)をとおして「ありがとう」と言われる機会づくりや、地域の中で「ひきこもり」への理解が深まるよう、地域へみんなが発信していきます。

人の暮らしに 制度を合わせて 創造していく

彦根地域障害者生活支援センター
ステップあつぷ21 次長 石澤 英明 さん



今回、「滋賀の縁創造実践センター」の小委員会に参加させていただくことになりました。「制度に人の暮らしを合わせるのではなく、人の暮らしに制度を合わせて、創造していく」。このフレーズが、とても新鮮に感じ、あらためて、私達の仕事に必要な事の原点、つまり「創造」という事を考えていくこのような機会に巡り合うことができ、とても感謝しております。

これからも、このフレーズを胸に、「人の暮らし」を見つめ続けていきたいです。

縁のご縁を 子どもたちを 導く大きな灯台に

NPO法人四つ葉のクローバー理事長 杉山 真智子 さん



「死にたい、気が狂いそう。生きる意味がわからない。目標もない」。養護施設で暮らしていた18才の言葉です。虐待等のつらい過去を抱え、高校を中退するなどでハンディを背負い、頼れる親もいない彼らはそれでも生きていかなければなりません。大人になっても親のスネをかじる人が多い中で、精神を病んだり、生活保護に頼らざるを得ないケースもあります。施設を巣立って社会に出ると、周囲に気持ちを受け止めてもらえない経験を積み重ね、怒り、悲しみ、苦しみ支配されるあまり、様々な問題を自ら呼び寄せてしまう傾向も多いです。

光を求めて暗闇をさまよう子どもたちの姿は大人へのさまざまな課題と言えます。この度、縁に頂くご縁はまさしく大きな灯台となり子どもたちを希望の光に導いてくれることを願います。

多様な「ひきこもり」の 背景をさぐり地域での 居場所づくりを提案

湖南地域障害者生活支援センター 相談課
相談支援センターあんず 相談課長 太田 珠美 さん



ひととの交わりや社会参加が苦手なひと、憂いを相談できず抱え孤立している家族など「ひきこもり」状態は多様です。その実態とケースそれぞれの背景を探りながら、各地域での取り組みを知ることから始めています。地域を越えた情報の共有や出会いも期待できそうです。

また、本人(家族も)が、地域の活動や働きの担い手となり、強みや主としての営みを実感できる、居場所や交流の場のかたちを、提案していきたいです。

地域のなかにある生活課題

課題別小委員会

4

相談の場はあるが その後の場がない

失敗体験、体験の欠如、軽度の病気・障害などにより、制度を利用できず、働きづらさを抱えている人がいる。そのような人が一般就労につながるまでの練習をしたり、その人らしく働けたりする場所が不足している。



「生きづらさを抱えた人の働く場づくり」 小委員会

- 制度の対象にならない等、働く場につながりづらい人を対象とする。
- 誰であっても、働くことを通して人とつながり、「ありがとう」と言われることは、大きな力になる。個人に応じた「働く場」が必要。

5

様々な人の「居場所」が必要

世代や抱えている背景、障害の有無などをこえて、様々な人が「少し休んだり、相談できたり、活躍できたりする」身近な「居場所」というニーズをもっている。なかでも、学校に馴染めず周りの人間関係から孤立している子どもの居場所づくりが求められる。



「居場所づくり」小委員会

- 学校や家庭から孤立している／しつつある子どもに、週に1時間・1日でも家以外に居られる居場所づくりが必要。
- そうした子どもの居場所として、特別養護老人ホーム等の社会福祉施設を利活用することで、「ただいま」と帰れる場所や施設のお手伝いを通じて「ありがとう」を経験することができる場所となれるのではないかな。

6

福祉関係者のたて・よこの つながりが弱くなっている

同じ福祉職員でも、高齢・子ども・障害等、職種が違う人とはなかなか話す機会がない。もっと同じ地域のお職種の人と連携することで、支援も広げられたら。

福祉を志す若者たちに、先輩として「縁」の取り組みを伝えていけたら。



「縁結び・つながりづくり小委員会」

- 福祉を志す学生とちょっと先輩の福祉職員や、分野の違う福祉職員同士が柔らかな雰囲気の中で「福祉のこと」を話せる場があると、「縁」がめざしているプラットフォームのことが少しでも実感できるのではないかな。
- パートナーを見つけて自分の家庭をつくりたいと思っている福祉職員同士が出会う場づくりは、仕事への意欲と地域の活性化につながるのではないかな。

7

1つのサービスや制度だけでは 支えられない人や家族が増えている

縁センター会員は相談支援や高齢者や障害者のケア、保育のなかで困難な生活課題を抱える家族に出会うことが多々あります。現場からは「放っておけないけどどうしたらいいのかわからない」という声があがっています。



「気づきシート」小委員会

- まずは「気づきシート」を用いて、会員のニーズキャッチ力および課題を明らかにする力を高めます。
- そこから明らかになった困難課題（制度の谷間となっている事例、複数の問題が絡み合っている事例等）を、関係する様々な分野の支援者が集まる事例検討会で共有し、会員の問題解決力を高めます。

活動内容

県内の既存の取り組みには、若年認知症の人や生活困窮者を対象としたものがあります。キーワードは、①生きづらさを抱えた人が社会や人とのつながり、やりがい・生きがいを感じられること、②ケアとしての「働く場」であること、③人によっては、一般就労につながる練習の場としての「働く場」であることです。このような「働く場」を、企業や社会福祉施設と協力し、地域のニーズや魅力を活かしながら開拓する予定です。

社会的な要因から学校に行きづらくなっている子どもを対象にした居場所づくりとして、社会福祉施設（特に24時間365日必ず誰かがいる入居施設）のスペースを活用したモデル事業の企画に取り組んでいます。

居場所づくりを進めるにあたり、施設の機能や職員の力だけでなく、社協や学校、地域住民と連携・協働し、子どもたちを地域で支えていくことができる実践と仕組みの構築を目指しています。

井戸端会議やたまり場、サロン、カフェのようなゆっくりリラックスできる雰囲気の中で福祉を志す若者（学生と若い福祉職員）が同じ目線で交流し、分野や所属を超えてつながりを持つことの楽しさを味わう居場所「ふく・楽カフェ～縁～」を企画中です。

福祉職場で働く男女の縁結びにも継続して取り組みます。滋賀で家庭を持ち、子育てしながらいきいきと仕事をする人づくりとして、縁結び事業を県内各所で開催します。8月23日の第1回企画では、5組のカップルが成立しました。

「滋賀の縁塾」

困難を抱えた本人や家族の支援に必要ないろいろな分野の職種が連携して、本人や家族を支えていけるよう、多職種がまじりあう事例検討の研修会「縁塾」を積み重ね、支援する人を応援します。

この小委員会は、大学の先生方や社会福祉士会会員の皆さんの協力で活動します。



NPO法人滋賀県社会就労事業振興センター
常務理事 城 貴志 さん

企業や地域の
みなさまと
滋賀ならではの
「働く場」を創りたい!

働くことで得られるものは大きい。給料のみならず、誰かにあてにされ、「ありがとう」と言われることは生きるうえで力になります。また、「働く場」は「生きづらさを抱えた人」だけの問題ではありません。地域に雇用がなくなれば人は外へ出ていき、地域は衰退していきます。滋賀県には人手不足の産業や魅力的な観光資源、守るべき伝統・文化がたくさんあります。福祉のみではなく、企業や地域のみなさまと滋賀ならではの「働く場」を創っていききたいと思います。

“不登校の
子ども・その親が
相談できる居場所”
の実現に向けて



特別養護老人ホーム
カーサ月の輪
施設長
日比 晴久 さん

一人でも支援を必要とする方がいらっしゃれば、その一人のために企画する。「居場所づくり」小委員会では、地域の方からご提案いただいた、「不登校の子ども・その親が相談できる居場所」の実現に向けて動き出しています。滋賀県の小学校不登校児童の数は、100人あたり0.46人（平成24年度 全国ワースト2位）。子どもやその親が孤立することが無いように、まずは自身の所属する施設においてモデル事業として取り組みます。

職場のつながりを作り、
元気づくりを応援します



守山市社会福祉協議会
小島 健史 さん

「滋賀県民が生き生きと地域の中で暮らしていくには、その一助を担う福祉の職場自体が生き生きと元気でなければ」この小委員会では、老人・障害者・子ども等分野を超えた福祉の職場同士のつながり事業（「男女の縁結び事業」、「交流会」等）や、近い将来、福祉の職場を担ってくれる大学生と福祉の先輩とのつながりづくり事業（「ふく・楽カフェ～縁～」等）の実施を通して、福祉の職場の元気づくり・つながりづくりを応援していきます。



滋賀の縁創造実践センター 設立総会が開催されました

本センターは、平成26年9月1日に設立総会を行い、正式に発足しました。当日は参画団体・法人などから約160名の方々が参加。記念行事では、辻哲夫さんの「創造実践そしてシステム化—滋賀での学びから」という講演と、「縁への期待や思い」についてのリレートークを行い、これからのセンターでの取り組みへの決意を新たにしました。



シンボルマークが決定しました

上記の設立記念行事にて、最優秀賞1点と優秀賞2点に選ばれた作品の表彰式を行いました。選考にご協力いただいた成安造形大学の藤田隆教授より、「3点とも素晴らしいイラストでした。みんながつながること・縁のことを考え、思いを込めたイラストができたのでは」と講評。こちらの2作品はイメージデザインとして、今後の活動に活用させていただきます。

※最優秀賞 藤居紗来さん(長浜市立長浜北小学校3年)
本誌3ページに受賞作品とコメントを掲載しています。



優秀賞 渡部 照さん(大津市立青山中学校3年)



“縁”という字をじっと見つめていると、へんがつくりが手をつないでいるように見えたので、人々が心を結び、手を携えて助け合って暮らしていけるように願いを込めて作りました。実は、この2人の子には名前があって、「ゆかりん」と「えにっしー」という名前です。2人あわせてエンジェルズといいます。このマークの裾側が羽のデザインなのは、ご縁のエンと天使のエンジェルにかけているからです。今日は、このような素晴らしい賞をいただき、大変うれしく思っております。



優秀賞 大埜 剛さん(湖南市立甲西中学校勤務)



私は普段中学校の教師をしているのですが、人と人とのつながりや仲間とのつながりの大切さというものは、常に子供たちに伝えているつもりです。今回このマークをつくるにあたって、“人”という漢字を使いました。(マークのように)人と人がつながることで空間ができるのですが、この一つ一つを花びらに見立ててもらおうと、すごくきれいな花が咲いていると思うんです。社会とつながりたいけどつながりづらい、あるいはどうにか助けてほしいけどどうやってつながったらいいのかわからない—そんな人たちにとって一筋の光を与える存在であってほしい、そういう人たちの心の中にこういう心の花が咲いたらいいなと思い、こうしたマークを描かせていただきました。本日はありがとうございました。

ホームページを開設



ホームページでは縁センターの活動や小委員会の動きについて情報発信しています。フェイスブックページも開設しました。ぜひアクセスしてください!

<http://www.shigashakyo.jp/enishi/>

編集後記

今回取材に訪れた場所では、ひとつひとつの出会いを大切に、地域に住まう皆が一時でなく、ずっと顔を出し続けることのできる居場所にするための努力を惜しまずにされている姿が印象的でした。皆の安らげる居場所にするために心を砕きながら、スタッフ自身が楽しむ事も忘れない。そんな人が、場所が、身近にあることで楽しく日々を送る人々の笑顔を見て、今まで“縁”について「気がついたらそこにあったもの」という認識でいた自分にも、まだまだできることがあるのではないかと元気をもらいました。

ただいま、会員を募集しています!

本会の設立趣旨に賛同し、主体的に活動しようとする仲間を随時募集しています。私たちと一緒に、皆さんの周りの困りごと解決に向けた仕組みづくりに取り組んでみませんか? 規程や申込み等詳細については、左記ホームページよりご覧いただけます。

(1) 団体・法人会員

本会の設立趣旨に賛同し、他の会員とともに本会活動の主体者として参加しようとする団体・法人

(2) 個人会員

本会の設立趣旨に賛同し、他の会員とともに本会活動の主体者として参加しようとする個人

(3) 賛助会員

本会の設立趣旨に賛同し、本会活動を賛助しようとする団体等

ご参画、お待ちしております!